

吉村実紀恵歌集

『バベル』

(短歌研究社)

第三歌集。三十歳からの十年間、短歌から離れていた作者の二十二年ぶりの歌集である。女性として生まれ、子を持たない人生を送ることへの複雑な心境が歌集全体を通しての大きなテーマとなっている。

何をもて天与の性と和解せむ遂にいのちを産むことな
くて

母となることなく生きてタクシーの深夜料金割増表示
自分自身で選んだのではない「女性」という性を背負つ
て生きることへの葛藤が表れている。深夜まで仕事をした
帰路にも、子を持っていた場合の人生について思いを巡ら
せたのだろう。仕事の歌や恋愛の歌を含め、自身の人生を
真正面から真摯に見つめる歌集と言えるだろう。

また、抑えた文体ながら、作者の社会への眼差しの鋭さ
が印象的である。

明日からはまた現実と言う人の今日はそれなら何であ
ろうか

うなだれて咲く水仙の首ほそし置かれた場所で咲けと
言われて

忙しない「現実」から離れて楽しく過ごしている時間も、
われわれは結局、現実の中にいるのではないか。美しい教
えと言われることは無条件に良いものなのだろうか。作
者の静かなる問いにはっとさせられる。(谷川 恵)

工藤吉生歌集

『沼の夢』

(左右社)

人間だれもが持つ暗い感情を、こんなに爽快に歌い切つ
た歌集があるのか。クセになるユーモアに引き込まれる。

捨て場所を探して歩くビニールのゴミを握ればオレの
温度だ

ゴミと自分の体温が同化したことで、自分も社会から不
要とされているのではと疑念が生じる。誰もが経験のある
題材を持ち出して、現代人に潜む疎外感を軽やかに炙り出
す。風刺的な内容であるのに攻撃性がないのは、自虐の笑
いを取り入れているからなのだろう。

オレが来たせいでやる気を完全になくした待合室の加
湿器

待合室という誰もが使う場所の加湿器。自分が来てから
急に調子が悪くなる居心地の悪さをいっそ楽し気に詠む。

ふつくと陽のあたる街 ここに住む誰もが泣いたこ
とのある人

光に包まれた街で闇を抱えているのは自分だけではない
という気づき。「ふつくと」という肉感的な初句が下の
句の実感を詩的に昇華させ、切実な説得力を産み出す。

いりぐちはどこも閉じててそとにいるさびしいものは
ふくらむばかり

さびしいものを見つめ続けて社会に立ち向かうのだとい
う気概が感じられる。歌集の象徴的な一首。(梅田陽介)